

2018. 11. 9

ウエーブ

時評



田中 均

揺れる欧州

たなか・ひろし 69年京大法卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て（株）日本総研国際戦略研究所理事長、（公財）日本国際交流センターシニア・フェロー。

欧州は揺れている。「Brexit（ブリグジット）」の行方は未だ混沌としたままで2019年3月の英国のEU離脱のデッドラインは刻一刻と近づいている。これは退くと発表した。

フランスでも9月のマクロン大

え方はどうなのか。そのような問題意識を持ち10月中旬、ベルリンで日独有識者の「日独フォーラム」に出席し、帰国の途次隣国チェコに立ち寄り、有識者の意見を聞いた。

先般行われた日英賢人会議でも感じたが、Brexitを巡って英独両国において当事者として事態を打開しようという迫力に欠けているように見えた。ただ、ドイツにとって英国に妥協をして悪しき先例をつくり追隨する国が出てくることは何としてでも防がなければならぬという姿勢は変化の余地がないように見えた。

中国はこのような間隙をついて欧州との関係を大きく伸張させている。欧州には共産党一党体制に対する警戒心はあるが、所詮中国は遠く、安全保障上の脅威感を持つには至らない。米国のトランプ政権が「アメリカ第一」を掲げ欧州諸国にも強い違和感を生じさせている時、いわば経済的利益を享受できる都合な相手と映っているのだから。中国とロシアが協調して国際秩序を変更していくことの問題点を指摘しても、現在の欧州には大きな国際秩序を考える余裕はない。当面は揺れる欧州の安定をどう取り戻すかに腐心せざるを得ないということか。

欧州は揺れている。「Brexit（ブリグジット）」の行方は未だ混沌としたままで2019年3月の英国のEU離脱のデッドラインは刻一刻と近づいている。これは退くと発表した。

先般行われた日英賢人会議でも感じたが、Brexitを巡って英独両国において当事者として事態を打開しようという迫力に欠けているように見えた。ただ、ドイツにとって英国に妥協をして悪しき先例をつくり追隨する国が出てくることは何としてでも防がなければならぬという姿勢は変化の余地がないように見えた。

このようなことを考えるとやはり、Brexit交渉における英国の立場は弱いと感じざるを得ない。英国も地域や世代間の分断と

ともに保守党内の分断は深刻であり、統一的な立場を作ることすら困難となっている。結果的には問題を先延ばしし、20年末の移行期間の終了をさらに引き延ばしていくしかないのではないかとの思いに駆られる。